

連続的な成功，失敗事態での因果帰着， 成功期待の様相について

橋 良 治

Phases of Causal Attribution and Subsequent Expectancy on
Successive Outcomes

Yoshiharu Tachibana

問 題

“何によって”成功，或いは失敗したのかという知覚が達成行動を認知的に媒介する，というのが達成行動の因果帰着理論の主張するところである（Weiner, Frieze, Kukla, Reed, Rest & Nierenberg, 1971; Weiner, 1972）。成功，失敗を説明する主要な原因として，Heider (1958)のあげた，能力，努力，課題の困難度，運という4つの要因が用いられ，これらが統制の所在（locus of control：内的，外的），安定性の程度（stability：安定，不安定）という2つの次元に配置され（表1を参照），その文脈において検討されるのである。

認知的な動機づけモデルの多くが，行動は目標到達への主観的期待と目標の誘因価の両者によって決定される，としている。その意味で多くの行動の認知モデルが一般に，〈期待×価値〉理論と呼ばれる（Weiner, 1974）。達成行動での成功，失敗経験の後，目標期待は変化するが，その変化は因果帰着づけの様相と深くつながりをもつ。たとえば，能力の低さに帰着されるような失敗は，不運に帰着されるような失敗にくらべて次回以降の成功への期待を大きく減じさせるし，一方，能力の高さに帰着されるような成功は，幸運に帰着されるような成功にくらべて次回以降の成功への期待をより高める。達成行動の因果帰着理論にあっては，“誘因価”が統制の所在次元に規定されるのに対して，“期待”は安定性次元に規定されるといわれる。即ち，能力や課題困難度といった安定要因への帰着は，努力や運という不安定要因への帰着にくらべて，成功後ではより期待を高めることになるし，他方，失敗後ではより期待を低めることになる主張されている¹⁾。

因果帰着の安定性次元と成功期待の関係を実証的に吟味した McMahan(1973)は，アナグラム課題を用いて5度繰り返しの成功，失敗経験を与え，各回後に4要因に関しての因果帰着づけと“期待”（次回の成功に対する自信度）を評定させた。その結果，各因果要因と成功期待の相関関係を吟味してみたところ，全般的に相関係数は低かったが，方向としてはある程度一貫性があった。即ち，成功事態では，能力，課題困難度という安定要因への帰着が高いほど，次回への成功期待は高かった。反対に，努力，運という不安定要因への帰着が高いほど，次回への成功期

表1 成功，失敗の認知的決定要因

| 安定性 | 統制の所在 | |
|-----|-------|-------|
| | 内的 | 外的 |
| 安定 | 能力 | 課題困難度 |
| 不安定 | 努力 | 運 |

待は低かった。一方失敗事態では、能力、課題困難度の安定要因への帰着が高いほど成功期待は低く、努力、運の不安定要因への帰着が高いほど成功期待は高かった。

Weiner, Heckhausen, Meyer & Cook(1972) では、数—シンボル置換え作業を用いて、5回連続の失敗経験を与え、安定要因（能力+課題困難度）への帰着の高低と、成功期待の関係をみた。ここでは、安定要因への帰着が高い群は、安定要因への帰着が低い群にくらべて、失敗後の成功期待を大きくひき下げることが見出された。更に、Meyer (1970) は、成功事態において因果帰着の安定性の次元と成功期待が密接なつながりをもつことを見出している。

本研究では、パズル課題を用いて連続的成功、失敗事態を設定し、連続的な成功、失敗経験の効果を因果帰着づけや成功期待の変化においてみようとする。更に、達成動機水準の異なる個人はこのような繰り返しの成功、失敗経験で、どのような因果帰着づけ様相の差異をみせるか、ということについても吟味される。先ず、成功事態について仮説的に考えてみると、高達成動機の個人は成功を能力や努力に帰着つける傾向があることが知られており、試行の進行とともに安定要因への帰着が高まっていくことが予想されるが、その中でも能力への帰着を増大させていくことになるだろう。一方、低達成動機の個人は成功についてはむしろ課題困難度や運といった外的な要因に帰着つける傾向があることが知られており、この場合は特に課題困難度への帰着の増大がみられるだろう。

次に失敗事態について考えてみると、高達成動機の個人は失敗を努力不足のせいにし、能力不足のせいにはしないとされているので、安定要因のうち、課題困難度への帰着が相対的に増大するだろう。反対に、低達成動機の個人は失敗を自らの能力不足のせいにする傾向が強いとされており、能力への帰着が特に増大するだろう。

目 的

因果帰着の安定性の次元についての分析を中心とした以下の仮説の検証。

3回連続の成功、失敗事態において——

- 1、因果要因別にみれば、試行を重ねる毎に安定要因への帰着が増大し、不安定要因への帰着が減少するだろう。
- 2、因果要因相互の関係からみれば、試行を重ねる毎に安定要因への帰着が不安定要因への帰着に対して優位を示すようになるだろう。
- 3、達成動機の個人差という観点からみれば、高達成動機群は、成功事態では能力への帰着が、失敗事態では課題困難度への帰着が特に増大することになるだろう。一方、低達成動機群は、成功事態では課題困難度への帰着が、失敗事態では能力への帰着が特に増大するだろう。又、失敗事態において、低達成動機群は高達成動機群にくらべて、成功期待評定において低い値を示すだろう。

方 法

被験者 大学生（京都教育大および滋賀大の1, 2回生）252名より、実験条件に適合した（3試行連続の成功、或いは失敗経験をえた）男女156名を抽出した（うち男子は36名、女子は120名であった）。実験は個別形式で行なわれた。

課題 3 試行連続の成功、失敗経験を与えるため、3 種のパズル（いずれも、7 個の形態片を用いてさまざまな有意味図形を作成させる市販の“ラッキーパズル”）が施行された。3 試行成功の成功群、3 試行失敗の失敗群を形成しやすくするため、パズルの困難度についてはある程度の配慮がなされた。しかし、困難度のレベルが個人間、又個人内で大幅に異なることは、因果帰着づけに大きなゆがみを生じさせることになるので極力避けられた。その結果、被験者の項にみられるような大きなロスが生じたのである。

達成動機の測定 Atkinson (1964) の方法に則して、成功接近動機と失敗回避動機を合成し、総合的達成動機を設定した。成功接近動機については、TAT 法により、図版 5 枚各々について 5 分間で想像物語を自由記述させた。採点は各物語について、達成動機を含む、達成動機を含まない、の 3 種類に分類し、各々 2・1・0 点を与えた。従って得点範囲は 0 から 10 点までである。採点は、大学院生 2 名が別々に行い、その採点者間信頼性係数は 0.87 を上回っていた。

失敗回避動機の測定については、Mandler & Sarason (1952) のテスト不安質問紙（浜, 1969）を用いた。成功接近動機、失敗回避動機の各々の得点は中央値を目安として 2 分され、高接近—低回避の被験者達が高達成動機群、低接近—高回避の被験者達が低達成動機群とされた。最終的には、高達成動機の成功群、失敗群、又低達成動機の成功群、失敗群にそれぞれ 16 名ずつが配された。

手続き パズルのやり方が説明され、例として 1 つのパズルが目前で 30 秒程度でやってみせられた。その後、制限時間 2 分で 1 つのパズル課題が施行され、続いて因果帰着づけと次回の成功期待度の評定が求められた。それが計 3 度繰り返された。3 度成功を繰り返した被験者達を成功群、3 度失敗を繰り返した被験者達を失敗群としたが、両群はともに 78 名ずつを得た。

評定 因果帰着づけについては、能力、努力、課題困難度、運という 4 要因内での一対比較が行われた。つまり、たとえば、“今の成功、或いは失敗について次の A、B のどちらがより大きく影響したと思いますか——1、A あなたの能力、B あなたの努力；2、……” というような形式がとられた。結局被験者は、1 試行の因果帰着づけについて 6 回 (${}_4C_2$) の比較評定を行ったわけである。得点は 1 選択につき 1 点としたので、各要因での得点範囲は 0～3 点であった。成功期待評定については、“もう一度同じ程度のものをやるとしたら、どの程度の成功の見込みがあると思いますか。”と尋ね、0%から100%まで10%きざみの11段階評定で 1 カ所に○をつけさせた。

結 果

成功、失敗事態の因果要因別の分析 各因果要因別に、結果（成功、失敗）、試行（3 回）の効果を示したのが図 1～図 4 である。

図 1 の能力帰着については、成功群よりも失敗群の方が高い能力帰着を示し ($F [1, 152] = 220.42, p < .001$)、試行とともに能力への帰着が高められた ($F [2, 304] = 5.47, p < .01$)。図 2 の努力帰着については、失敗群よりも成功群の方が高い努力帰着を示し ($F [1, 152] = 6.01, p < .01$)、試行の進行とともに努力への帰着は減少した ($F [2, 304] = 4.47, p < .05$)。課題困難度への帰着（図 3）については、交互作用が有意で ($F [2, 304] = 11.74, p < .01$)、第 2 試行以後は失敗群よりも成功群の方が課題困難度帰着を高くし ($p < .001$)、試行の効果については、成功群が帰着

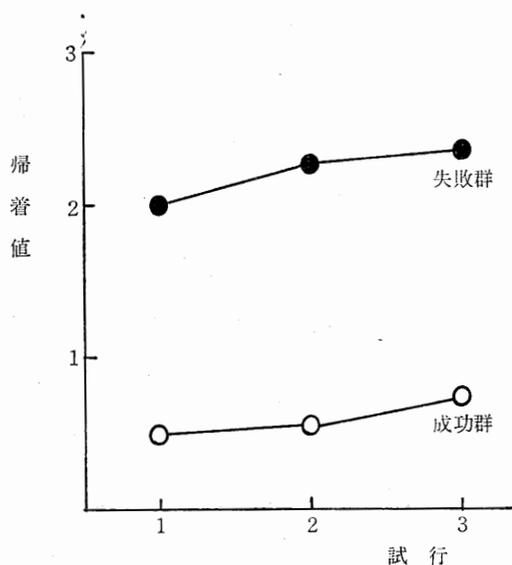


図 1. 成功群, 失敗群の能力帰着値

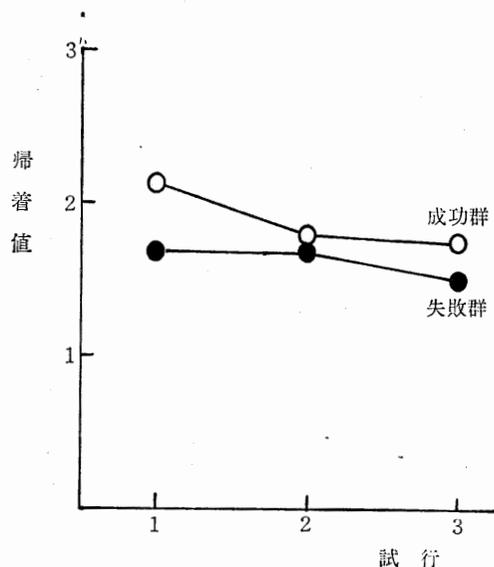


図 2. 成功群, 失敗群の努力帰着値

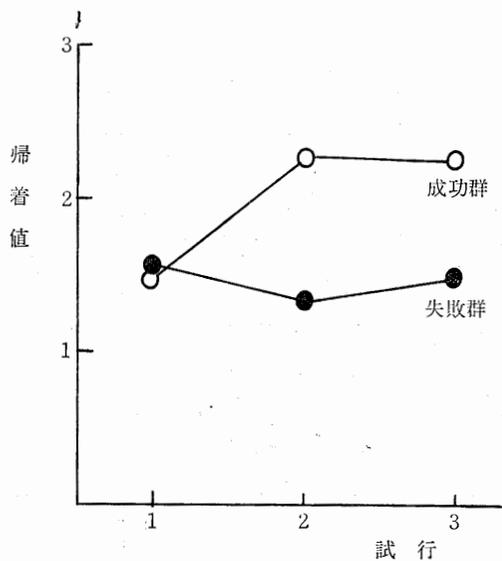


図 3. 成功群, 失敗群の課題困難度帰着値

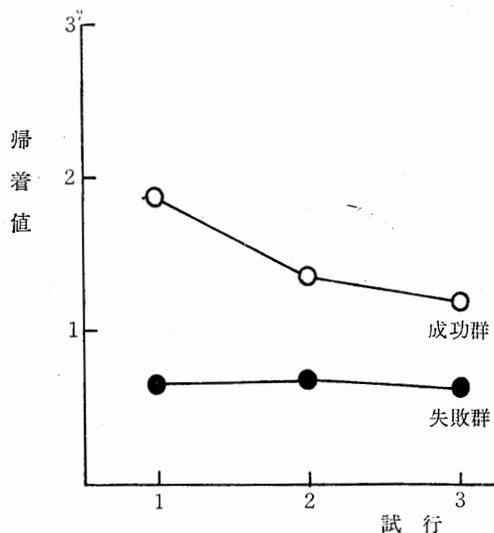


図 4. 成功群, 失敗群の運帰着値

の増加を示した ($p < .001$) のにくらべ, 失敗群では変化がなかった。図 4 の運帰着の場合にも交互作用が有意であった ($F [2,304] = 9.58, p < .01$)。即ち, 失敗群よりも成功群の方が高い運帰着を示したが ($F [1,152] = 51.92, p < .001$), 成功群の場合は試行の進行とともに帰着が減少したのに ($p < .001$), 失敗群の場合は変化がなかった。

仮説 1 については, 若干の例外 (失敗事態での課題困難度帰着に試行の進行による増大がみられなかったこと, 又失敗事態での運帰着に減少がみられなかったこと) を除いて, おおむね支持されたといえよう。

橘：連続的な成功，失敗事態での因果帰着，成功期待の様相について

成功，失敗事態の因果要因間の分析 図5，図6はそれぞれ，成功，失敗の場合における因果4要因間の Thurstone Case V の尺度値（各尺度値の総和は0）と，その95%の信頼区間を示している²⁾。この分析では，信頼区間が0を含まないポジティブな領域にあるもの，信頼区間

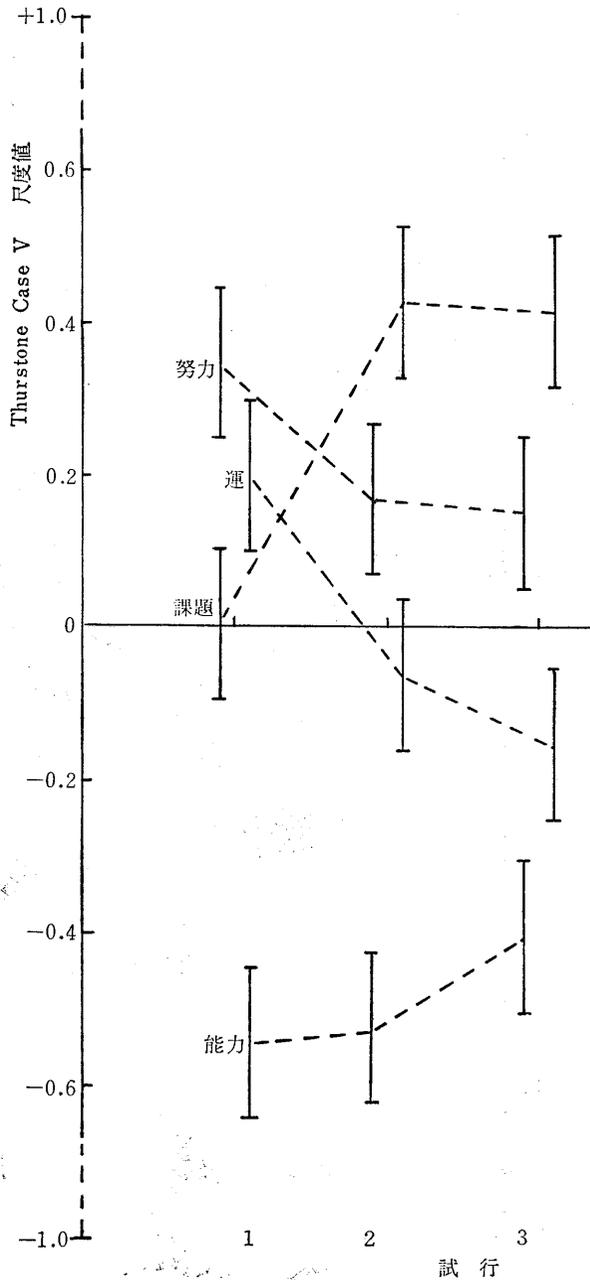


図5. 成功事態での，因果4要因間の Thurstone Case V の尺度値とその95%の信頼区間

に0を含むもの、信頼区間に0を含まないネガティブな領域にあるもの、というように、含まれる4要因を分類して考えることにする。第1の領域にある要因が、関与することの大きかった優位な帰着因とみなされ、第3の領域にある要因が、関与することの小さかった劣位な帰着因とみ

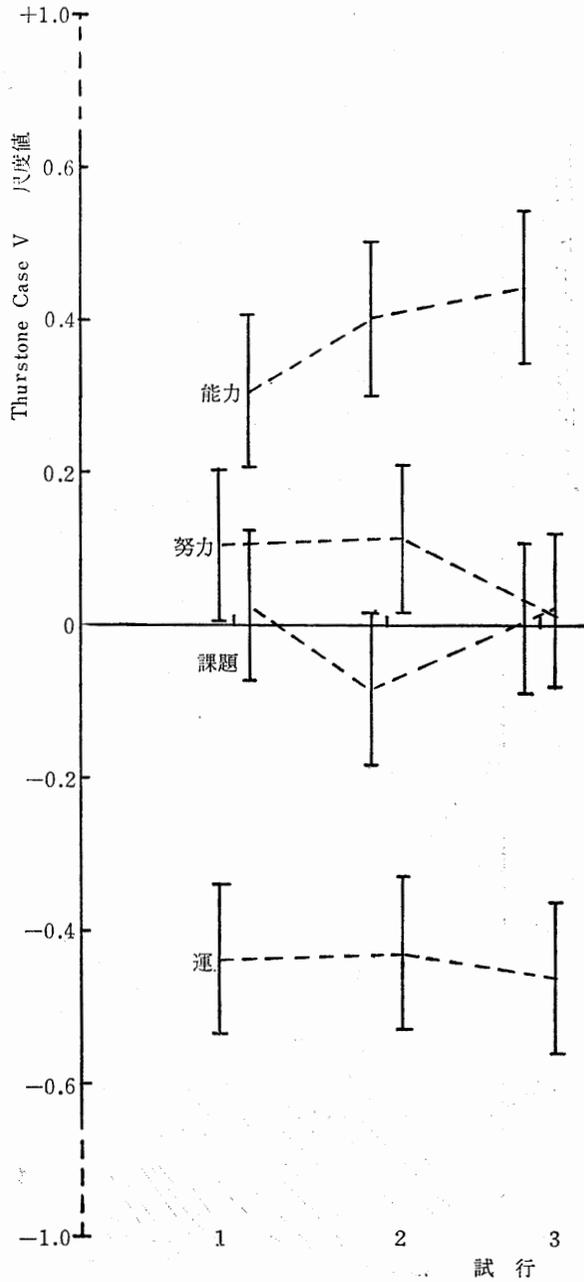


図 6. 失敗事態での、因果4要因間の Thurstone Case V の尺度値とその95%の信頼区間

橘：連続的な成功、失敗事態での因果帰着、成功期待の様相について

なされる。図5、図6から、結果別、試行毎の優位な帰着因を更にとり出したのが表2である。成功事態についてみると、第1試行で努力、運という不安定要因が優位を占めたが、第2、第3試行では運に代って、安定要因である課題困難度が台頭した。又失敗事態では、第1、第2試行で不安定要因である努力が優位な帰着因の一端を担ったが、第3試行では安定要因である能力のみが優位な帰着因となった。このように、仮説2についても、顕著とはいえないかもしれないが確実に安定要因優位への移行がみられ、支持されたといえるだろう。

表2 成功、失敗条件での試行別の優位な帰着因

| | 1 | 2 | 3 |
|----|-------|-------|-------|
| 成功 | 努力、運 | 課題、努力 | 課題、努力 |
| 失敗 | 能力、努力 | 能力、努力 | 能力 |

成功期待評定と結果、試行の関係について 分散分析によると、結果（成功、失敗）と試行の間に交互作用 ($F [2,304] = 68.64, p < .001$) がみられ、成功の場合は試行の進行とともに成功期待が増大し、失敗の場合には試行の進行とともに減少した（ともに $p < .01$ ）。(図7参照)

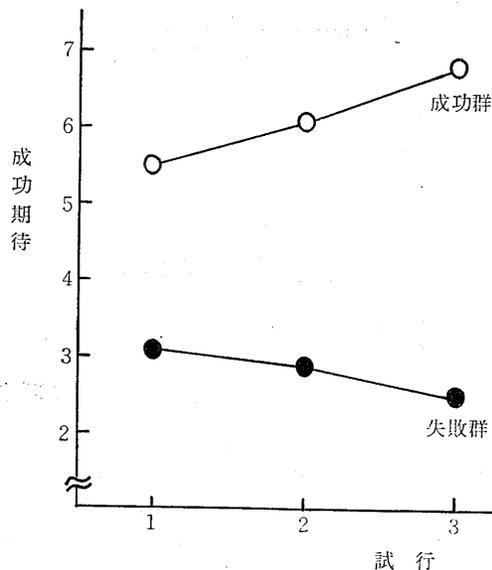


図7. 成功群、失敗群の成功期待評定値

達成動機水準が因果帰着づけ、成功期待評定に及ぼす影響についての分析 図8の能力帰着以外については、いずれも達成動機水準の効果に関して分散分析で有意差が得られなかった。図8の能力帰着については、結果（成功、失敗）と達成動機水準の間に交互作用がみられた ($F [1,60] = 4.20, p < .05$)。即ち、高達成動機群は低達成動機群よりも成功を自らの能力のせいにするのが大であって、失敗については低達成動機群ほど自らの能力不足のせいにするということがなかった（それぞれ、 $p < .05, p < .01$ ）。よって仮説3の前半は、高達成動機群と低達成動機群との比較において、能力帰着についてのみ支持されたといえよう。

成功期待評定については、成功事態において、高達成動機群は低達成動機群にくらべて高い成功期待値を示した ($p < .05$) が、失敗事態においては有意差が得られなかった (図9参照)。よって仮説3の後半は支持されなかった。

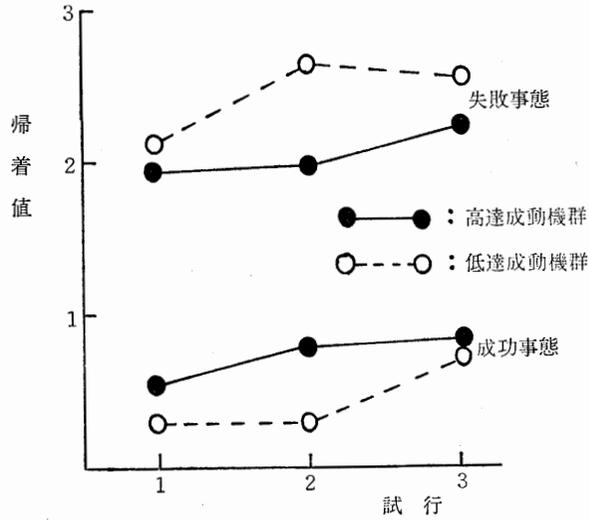


図 8. 高・低達成動機群の成功、失敗事態での能力帰着値

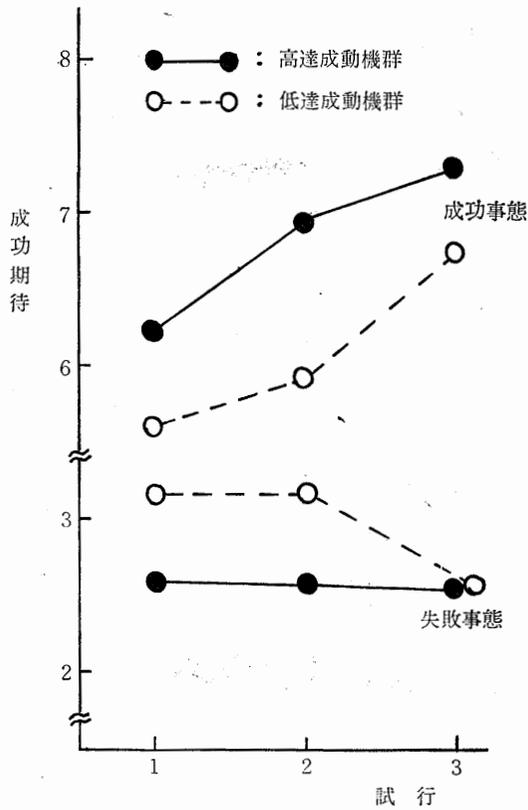


図 9. 高・低達成動機群の、成功失敗事態での成功期待評定値

考 察

仮説1，仮説2を支持した，今回の連続的成功，失敗事態における因果帰着づけの様相は，成功期待値の推移とあわせて考えると，全体的にみて，因果帰着の安定性の次元と成功期待のつながりを示したといえよう。即ち，因果要因内においては，おおむね試行の進行とともに安定要因への帰着が増大し，不安定要因への帰着が減少した。又因果要因間では，試行の進行とともに安定要因が優位にたった。そして，成功期待値はそういった事態に歩調をあわせた形で変化した。このような結果は Mc Mahan(1973)，Weinerら(1972)，Meyer(1970)など，因果帰着の安定性の次元と成功期待の関係を主張した研究の結果と方向性を一にするものであった。

しかし，今回の結果については，その他に吟味すべきいくつかの内容が含まれていたといえる。第1に——，因果帰着づけと成功期待について，今回必ずしも直接的にその関係を検討したわけではなかったが，上記のように全体として安定性の次元と成功期待の間の密接な関係が示された。しかしもう少し細かく吟味してみると，その内容は必ずしも均質ではなかった。つまり，成功，失敗事態を別個に，各要因毎にとりあげてみると，失敗事態において試行の進行とともに成功期待が有意に減少したが，因果帰着においてそれに対応した結果を示したのは，能力帰着での増加の傾向 ($F [2,304] = 3.00, p < .10$) のみで，他の要因については有意差が得られなかった。これは因果帰着の安定性の次元と成功期待の関係を論ずることはできない結果であった。一方成功事態では，試行の進行とともに成功期待が増大したが，因果帰着の4要因は全て試行効果が有意であった。即ち，安定要因である課題困難度帰着の増大 ($F [2,304] = 17.41, p < .001$) と能力帰着の増大の傾向 ($F [2,304] = 2.95, p < .10$) であり，不安定要因である努力帰着の減少 ($F [2,304] = 4.57, p < .05$) と運帰着の減少 ($F [2,304] = 20.03, p < .001$) であった。結局，成功による期待の増大は安定要因への帰着の増大，不安定要因への帰着の減少と結びついていたといえる。

これらの事実を従来の研究結果と比較してみると，先ず失敗事態に関して，Meyer(1970)，Weinerら(1972)はいずれも安定性の次元と成功期待の密接なつながりを見出している。しかし，今回の結果ではそのような関係が見出されなかった。成功事態についてみると，Meyer(1970)は必ずしも顕著な結果が得られなかったとしているし，McMahan(1973)においても相関係数の値は低く，明白な結果とはいえなかった。しかし今回の結果では，安定性の次元が成功期待に関連することがかなりはっきりしていた。

このように，これまでの研究で示されてきたような失敗事態での安定性次元と成功期待の密接な関係がみられなかったのにくらべ，これまで必ずしも顕著にあらわれなかった成功事態での密接な関係が見出されたことが今回の特色といえるが，これがどういった原因に依るものであったか，ということまでは今回の結果だけからでは分らない。

第2に，因果要因内，そして因果要因間の分析において明らかになった，被験者の“自信欠如”の傾向があげられる。先ず，因果要因内の分析においては，成功を自らの能力のせいにするよりは失敗を自らの能力不足のせいにし，失敗を不運のせいにするよりは成功を幸運のせいにする，という事実がみられた(図1，図4参照)。又，因果要因間の分析においては，劣位な帰着因の吟味からその事実が知られた。即ち，成功の場合には能力は一貫して関係なく，失敗の場合には運は一貫して関係ないとされた(図5，図6参照)。こういった“自信欠如”の傾向は，成功期待

の評定にもある程度反映されたと思われる。即ち、図7の成功事態と失敗事態とをくらべてみると、失敗事態における成功期待の低さが、成功事態における成功期待の高さにくらべて著しかった（縦軸の5を中心として折り返した関係）。

こういった事実は、これまでの欧米でのデータにみられた、“一般に成功は内的要因に、失敗は外的要因に帰着される。”という結果(Frieze & Weiner, 1971; Fitch, 1970; Weiner & Kukla, 1970)と全く異なっている。Nicholls (1975) や Luginbuhl (1975)らはいずれも、課題達成の重要性の程度により帰着パターンが異なると主張しているし、Fontaine(1975)は、それまでのデータのかなりがシミュレーション事態を扱ったものであったことに注目し、実際に成功、失敗を経験させる事態では帰着パターンが異なることを指摘した。このような点におけるチェックを行い、多様な状況設定をしたうえで、日本における帰着パターンの独自性が果たして存在するのか、ということが今後見究められねばならないだろう。

第3に、達成動機水準による帰着的バイアスは、能力帰着においてのみみられたが、この結果は橋(1975)と全く同じ内容であった。橋(1975)は、小学校5、6年生の男子児童に、迷路課題によって成功、失敗を組み合わせた経験を与え、因果帰着づけを求めたもので、方法的には今回とかなり異っていたといえる。能力帰着に限ってみると、結果の内容はこれまでの欧米でのデータ(Weiner & Kukla, 1970; Weiner & Potepan, 1970)と一致を示している。しかし、他の帰着因、ことに努力帰着に関しては、高達成動機の個人が結果の原因として努力を重んじるのにくらべ、低達成動機の個人は努力にあまり注目しない(Weiner & Potepan, 1970; Kukla, 1972)とされているが、今回の結果では有意差は勿論のこと、方向性すら確かでなかった。日本でのデータとしては、他に、シミュレーション事態で達成動機の個人差をとりあげた Hayashi & Yamauchi (1974)があげられる。そこでも、失敗事態において欧米での結果と一致しないものが得られた。即ち、高達成動機群は課題の難しさと努力不足に、低達成動機群は課題の難しさと運に帰着させることが大であった。

これらの事実から、ただちに日本に特有な達成動機水準に関連した因果帰着パターンの存在を追求しようとするには無理がある。これまで日本の達成動機研究は、アメリカでの概念定義や測定方法をそのまま受け入れ、そこにあてはめて考えようとしていた。しかし、達成動機も社会的動機の1つであり、日本という、欧米とは随分異なる社会風土を無視して考えることには疑問がある。改めてその本質を問うことにより、独特な側面があらわれるかもしれない。達成動機水準に関連した因果帰着のパターンということも、そういった新しい定義や測定方法の下で新たな局面を迎えることになるかもしれない。

このように、今回の結果は大きくみて、因果帰着の安定性の次元と成功期待の間のつながりを示したものといえるが、特に、成功事態においてその関係が著しかった。又、派生的内容として、成功と失敗についての因果帰着づけにおける地域、文化的な要因つまり、日本における因果帰着の独自性が示唆された。更にそういった因果帰着における独自性が、達成動機水準による帰着バイアスにも影響を及ぼしている可能性もまた示唆されたといえる。

注

- 1) 因果帰着と期待については、2つの研究の方向がある。1つは、〈因果帰着→結果→期待〉の関係を扱うものであり、これは、上述した内容についてのものである。もう1つは、〈期待→結果→因果帰着〉の関係を扱うものである。たとえば、Feather は、一連の研究 (Feather, 1969; Feather & Simon, 1971 a, b) において、予想どおり (期待が高くて成功した場合や、期待が低くて失敗した場合) や予想外 (期待が高くて失敗した場合や、期待が低くて成功した場合) の成功や失敗についての因果帰着の様相を吟味し、予想外の結果は運に帰着されることが大であり、予想どおりの結果は能力に帰着されることが大であることを見出した。本研究においては、専ら前者、つまり〈因果帰着→結果→期待〉の關係に焦点が絞られることになる。
- 2) 西里 (1974) 参照。

文 献

- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Van Nostrand.
- Feather, N. T. 1969 Attribution of responsibility and valence of success and failure in relation to initial confidence and task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 129-144.
- Feather, N. T., & Simon, J. G. 1971(a) Attribution of responsibility and valence of outcome in relation to initial confidence and success and failure of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, 18, 173-188.
- Feather, N. T., & Simon, J. G. 1971(b) Causal attributions for success and failure in relation to expectations of success based upon selective or manipulative control. *Journal of Personality*, 39, 27-541.
- Fitch, G. 1970 Effects of self-esteem, perceived performance and choice on causal attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 311-315.
- Fontaine, G. 1975 Causal attribution in simulated versus real situations: When are people logical, when are they not? *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 1021-1029.
- Frieze, I., & Weiner, B. 1971 Cue utilization and attributional judgements for success and failure. *Journal of Personality*, 39, 591-606.
- 浜 治世 1969 実験異常心理学 誠信書房
- Hayashi, T., & Yamauchi, H. 1974 Causal attributional judgements for achievement-related events. *Japanese Psychological Research*, 16, 40-49.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.
- Kukla, A. 1972 Attributional determinants of achievement-related behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 166-174.
- Luginbuhl, J., Crowe, D., & Kahan, J. 1975 Causal attributions for success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 86-93.
- Mandler, G., & Sarason, S. B. 1952 A study of anxiety and learning. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 166-173.
- McMahan, I. D. 1973 Relationships between causal attributions and expectancy of success. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 108-114.
- Meyer, W. U. 1973 Selbstverantwortlichkeit und Leistungsmotivation. Unpublished Ph. D. dissertation. Ruhr Universität.
- Nicholls, J. G. 1975 Causal attributions and other achievement-related cognitions: Effects of task outcome, attainment value, and sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 379-389.
- 西里静彦 1974 応用心理尺度構成法 誠信書房
- 橋 良治 1975 達成課題における達成動機水準と操作的な因果帰着及びそこに生じる感情反応について

京都大学教育学部紀要 XXV

の実験的考察—帰着モデルの明確化への試み 京都大学教育学部卒業論文 (未刊)

- Weiner, B., & Kukla, A. 1970 An attributional analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 1-20.
- Weiner, B., Frieze, I., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. 1971 *Perceiving the causes of success and failure*. General Learning Press.
- Weiner, B., & Potepen, P. A. 1971 Personality characteristics and affective reactions towards exams of superior and failing college students. *Journal of Educational Psychology*, 61, 144-151.
- Weiner, B. 1972 *Theories of motivation: From mechanism to cognition*. Markham.
- Weiner, B., Heckhausen, H., Meyer, W., & Cook, R. E. 1972 Causal ascription and achievement behavior: A conceptual analysis of effort and reanalysis of locus of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 21, 239-248.
- Weiner, B. 1974 *Achievement motivation and attribution theory*. General Learning Press.